同志社法学　二八巻四号　　四八（五〇八）

スタンリー・ボールドウィンとイギリス保守党の再建（二）（完）

――一九二二年カールトン・クラブ集会に至る政治過程――

梅津　実

一、はじめに
二、ロイド・ジョージ没落の論理
三、保守党の混乱・一九二一年―一九二二年（以上一四二号）
四、S・ボールドウィンのロイド・ジョージ批判
五、カールトン・クラブ集会
六、おわりに（以上本号）

四、S・ボールドウィンのロイド・ジョージ批判

ボールドウィンをロイド・ジョージの政治指導から訣別させた基本的な原因は、一言で言えば政治家としてのかれが、なによりも「連立内閣」の腐敗に耐えられなかったからであると言えよう。ここで言う「連立内閣」の腐敗とは、

同内閣がそもそも政党政治・議会政治を著しく軽視し、強烈な非正統的政治方法に代替した、その必然的なコロラリーとして派生した。すでに述べたように、ロイド・ジョージは危機への対処を急ぐあまり特異な政治方法を推進した。しかし、この事は結局既存の政策決定機構の無視にまで及び、その結果内政・外交の政策ほとんど全般に関して、政治ずきの素人、新聞記者、野心家たちなどロイド・ジョージ側近の自由な跳梁を許すことになったのである。[1] これは周知のように、P・ケアー(Philip Kerr)[2]、E・グリッグ(Eaward Grigg)、W・サザーランド(Sir William Sutherland)など、側近を中心とする首相の私的政策立案機関、すなわち政府外の「ガーデン・サバーブ」(Garden Suburb)[3]の跋扈にみられ、政府内ではF・ゲスト(Freddie Guest)、C・マカーディ(Charles McCurdy)など、歴代の連立派自由党幹事長による大胆な自由裁量とその行動にみられた。[4] 前者は、官僚政治を打破すると言う点では意欲的であったけれども、それはいわゆる政治屋の横行による政治腐敗の原因をつくったし、また後者は、「理念なく愛想のよいプレイボーイ」[5] F・ゲストの暗躍による爵位売買に示されるようなスキャンダルに傾斜しがちであったのである。こうした「腐敗の構造」全体が多くの者に不快の念を与えていたのであり、ボールドウィンのロイド・ジョージ批判を決定的にしたのであった。

ボールドウィンとともにロイド・ジョージ打倒に奔走することになるL・S・エイマリーは、こうしたボールドウィン決起の理由を回想して、「閣議で鉛筆をなめなめ同僚をみていたボールドウィンは、かれらの才気縦横ではあるが、しかし皮肉にも政治的・道徳的原則なき状態にいらだっていた。これがロイド・ジョージと有力者たちに共通する特徴である、とかれは考えたのである。かれとわたしは、戦後次第に親しい友人になったが、われわれはいつもつれだって議会から帰宅するのが慣習であった。(その帰り道)事態について議論してゆけばゆくほど、われわれはこ

れ以上いかなる権限を政府内にとどめておかなければならないのか次第に疑い始めてきた」[6]（カッコ内は引用者、以下断わりない場合はすべて同じ）と言っていた。

ある匿名の同時代人（実はハロルド・ベグビー）は、だからこうした現状に憤激しつつ、一九二四年にボールドウィンのロイド・ジョージに対する批判を賞揚して、つぎのように述べた。「わが公的生活における腐敗は、全国民の健康を蝕む苦痛の絶頂に達していた。……かつてソールズベリやグラッドストーンの次席秘書にも個人的には話しかけられなかったような人々が、いまや偉大な国務大臣たちの親友であり、雑談の相手であり、かつ仲介者である。これら不逞の輩の要求には、限度というものがなかった。自分たちとそのおべっか者の叙勲に満足せず、その属する党組織を繰縦する事に満足せず、ジャーナリズムと言うかつての崇高な職務の品位を下落させる事に満足せず、ついにこの粗野にして無知な連中は、イギリス帝国を支配する事を決意した」[7]。それゆえ「ボールドウィンは、かつてヴィクトリア期において絢爛たる特色を示した道徳的性格を、政府は喪失しつつあると考え、さらにかれは、もしもこうした道徳的腐敗が続くなら、イングランドの偉大と栄光にとってそれは致命的となるだろうと確信したのである。これを打倒し永久に根絶する事は、連立内閣に留まる幾人かの逸材に打撃を与え、かつ保守党・自由党において将来有望な幾人かの政治家たちを破滅させる事を意味していた。だがボールドウィンは、国家は才気煥発な人間によって統治されない方がより賢明であり、かつ保守党にとっても、長い目でみれば公的生活の全領域を害している体制を続けるより、むしろ愚直な人々に道を開く方がより賢明であると信じたのであった」[8]。

このような同時代人の観察の背後には、むろん古典的な貴族社会の政治を理想的なモデルとする保守党右派の見解が潜み、言うまでもなく、これには当時のダイハーズの情況認識に多く交錯する部分が含まれていたにちがいない。

したがって、こうした描写自体が一つの政治的立場の反映であるのは当然であるけれども、しかしここには、ボールドウィンのロイド・ジョージに対する批判の姿勢が明らかに浮き彫りにされているのである。

ボールドウィン自身は、この当時（二一年―二二年）ほとんど自己の立場を書き残さず、「最も沈黙せる大臣」[9]と呼ばれたが、前記H・ベグビーの証言によれば、すなわち問題はこうであった。ボールドウィンは、比喩的に言えば都会の汚なさより自然の美しさを尊重し、かつ守ることに賭けていたのであり、いわば田舎者たるかれの都会人に対する嫌悪感が、激しい現状批判に踏み切らせたのである。貧農の頑固さを心性とするボールドウィンにとって、政治の理想は田園の調和に表現され、その基本的な価値観はあくまでも「古き時代からの規範（オールド・スタンダーズ）」と「大古からの垣根（アンシャント・バリアーズ）」を堅持する事にほかならなかった。[10] 換言すれば、ボールドウィンのロイド・ジョージに対する批判は、腐敗の現象に対する怒りに留まらず、戦後急速に失なわれつつあった十九世紀以来の伝統的政治方法を敢然として擁護し、すでにこの時点でその復権を対置すると言う基本的な視角を含んでいたのである。かれの友人、J・C・C・ディヴィッドソンの表現を借りれば、「抜け目のない連中」が、議会はもとより政策の決定過程の中枢にまで蔓延し、「昔ながらの紳士階級（カントリー・ジェントルマン）や高尚な見識者（ラーンド・プロフェッションズ）」が消滅しつつある状況に、かれボールドウィンは保守主義者として、鋭い批判の目を向けていたのであった。[11]

こうしてボールドウィンは旗幟を鮮明にした。ヘンリー・ウィルソンの暗殺にみられるアイルランド問題の泥沼化、爵位売買、あるいはチャナク危機をめぐる戦争の可能性など、ボールドウィンをしてロイド・ジョージ批判に踏み切らせたものは、あくまでも具体的な政策の破綻であった。しかしその批判の根底に、かれは右のようなより基本的な問題をふくませていたのである。言い換えれば、かれのロイド・ジョージ批判は、保守党内の抗争の収拾に関しかれ

がどうかかわってゆくのかと言うことだけでなく、抗争の過程においてかれが情況をどのように観察し、どのような政治理想を掲げてこれに対決してゆくのかと言う基本的な問題をふくんでいたのである。

ところで、しばしば繰りかえすまでもなく、この時期全体を通じてボールドウィンは実はまだほとんど無名の存在であり、その地味な活動はほとんど世人の注目をひく事はなく、したがってその政治的地位を過大に評価する誤りを犯してならない事を、ここでさらに注意しておかなければならないであろう。当時ロイド・ジョージの政策決定に深く関与していたビーヴァブルックも、ボールドウィンを回想して、「かれの才能は認められていなかった。かれは自分で指導権確立の旗幟を掲げることも出来なかったし、かれの側では人々も結集しなかったであろう」[12]と、述べているほどである。このビーヴァブルックの回想には、かれが後にボールドウィンの最大の敵になるという事情もあっていささか誇張が含まれているように思われる。しかしそれにしても、当時のボールドウィンが変転たえまない政治的経験に一喜一憂する、いわば政治家としての成熟過程にあったことは確かであった。商務相として産業保護法(The Safeguarding of Industries Bill)の成立に挺身し、同法案が議会を通過したのち、ボールドウィンが自分の努力を讃える新聞記事の余白に、赤インクで「この美しい、心のこもった真実の言葉に学べ!」と書き込み得意満面の稚気を示した事を[13]、のちに二男のアーサーは証言している。こうしたエピソードは数多く存在しているし[14]、ボールドウィンは次第に政治的階梯を昇り次第に認められてきたとは言え、たしかにまだ、中心的な指導者群の一人であるにはほど遠い存在であったのである。

したがって、またそのロイド・ジョージ観が、当初は極めてアンビヴァレントな揺れ動きをした事も、ここでさらに指摘しておかなければならないであろう。かつて一九一四年、財政法案に関して新人のボールドウィンはロイド・

ジョージとアスキスを猛然と攻撃し、ときの国家的指導者たちを前に「政治指導者とは何か」を言って聞かせる大胆さをもっていた。[15] けれども政治家としては遅すぎる五四歳にして、始めて枢密院顧問官（Privy Councilor）の地位をえ、ついで商務相に昇格し、ロイド・ジョージ体制を支える一人として政治のダイナミズムを経験していった喜びと逡巡の過程には、首相そのものに対する畏敬と懐疑の念が、ボールドウィン自身のなかで微妙に交錯していたにちがいないのである。同じく息子のアーサーは、一九年当時の父の書簡を示して、たとえば、つぎのようにボールドウィンのロイド・ジョージに対する心の動きを示唆した。「先週の木曜日、自分はダービー邸で（指導者層と）朝食をともにした。明日もまた参加する。これは実に愉快な会合であり、われわれを統轄するちょっと不思議な天才（ロイド・ジョージ）を知るには絶好の機会だが、この人物はまことに桁はずれの複雑さをもっている」[16]と。二二年に猛然と連立内閣に反旗をひるがえすボールドウィンも、その直前にはまだ初々しい感覚をもって政治に加わり、若干の当惑をもって指導者層を観察していたのである。

こうしてボールドウィンの心の揺れ動きは、かれが二二年にいたっても少なくとも公的には「連立内閣」継続の必然性を容認し、たとえ懐疑的にではあっても、なおロイド・ジョージの政治指導を評価していたことにもあらわれていた。たとえば三月一八日、ジュニア・カールトン・クラブの集会においてかれは情勢を語り、すでに前章で述べた総選挙と保守党との関係にふれ、おおよそ次のように言っている。すなわち、保守党は選挙の際に「連立内閣」と袂を分かち独力で闘うべきだと言う要求が、今日、数多くの人々から表明されている。しかし、たとえ選挙が行なわれるとしても、現状においては三大政党が拮抗していてどの政党も他の二つの政党を制することができる状態にはない。したがって、選挙後政府が「連立内閣」と言う形で構築される事それ自体はやむをえないことである。ただ、問題は

それがどのような内容をもった「連立内閣」になるのかと言う事であり、わが保守党はこの点においてこそそのイニシアチブを握るべく陣営をかため、かつ全力をつくして闘う準備をすべきなのである。ここで首相について一言述べると、「わたし(ボールドウィン)は、皆がこぞって首相の悪口を言い、この地上における一切の悪を首相のせいにするのには反対である。なぜなら、こう言う態度は、戦後多くの人々が落ち入ったと思われる、一種のヒステリー的心理状態の典型だと思うから。一九一六年、戦争に対する批判が最も高まった時期に、保守党ほどかれが政権につくのを歓迎した政党は他に存在しなかった事を思い起さねばならない。われわれは、一九一八年に喜んでかれに協力した。……(そして、たしかに)今日、下院には数多くの保守党員が存在する。だがもし一九一八年にロイド・ジョージを権力の座につかせていなければ、これらの保守党員は議員たりえなかったであろう。今日、誰が首相に悪口を浴びせようとも、かれらにはその種の批判をほしいままにする資格などはないのである。……(むしろ)現在の連立内閣において、首相がわれわれの指導者ボナー・ロー氏とチェンバレン氏とに絶対的に忠実であったと言うこと、このことをわたしは認めるべきであると思うのである」[17]。

こうした発言にみられるかぎり、ボールドウィンは、ロイド・ジョージの強力な支持者であったと思われるかもしれない。事実、かれは閣僚の一員として表面的にはこのようにロイド・ジョージを支え、あくまでも事態の推移を凝視しつづけていたにすぎなかった。だが、ボールドウィンとロイド・ジョージは、結局はチャナク危機などのような具体的な政策をめぐってつねに衝突の可能性を秘めていただけでなく、さらに政治家として全く異質なタイプに属していたのであり、両者の決裂はあくまでも必然的なものであったのである。

これは、ロイド・ジョージがしばしば議会を軽視してまでも、しゃにむに政治の効果を追求する「攻撃型」政治家

であったのに対して、ボールドウィンが政治目的の追求に貪婪であるよりは、伝統的な議会政治のマナーと手続きを重視する「防禦型」政治家であったことに窺えよう。凡人ボールドウィンは、繰り返えすまでもなく自分で実際に土にまみれ豚を飼う農民の逞しさはもっていなかったが、読書し、旅行し、一九世紀の平穏な田園生活に観念的に憧れ、ときに都会の政治的強欲の日常に耐えがたい嫌悪感をいだくイングランドにおける平均的人物であり、[18] ロイド・ジョージのそれとは隔絶した世界をつくっていたのである。したがって、「たとえボールドウィンが、完全にロイド・ジョージの天才ぶりの真価を感得していたとしても、かれは決してロイド・ジョージの政治的・道徳的行為を信用せず、それゆえかれは極めて否定的な極めて批判的な立場から、ロイド・ジョージのいかなる提案・政策にも直ちに反対したのである。これは確かな事であったと思われる。両者はその精神と道徳の領域において完全に異った人生観をもっていたのであり、両者が本能的に嫌い合っていたとしても驚く事はない。ボールドウィンが、たとえロイド・ジョージのスピードのある敏感な意識の反応を評価していたとしても、基本的な問題となるや、両者は断然極端と極端に分裂した」[19] のであった。一方は無名の新人に近い政治家であり、他方は自己の内閣の成立後、一年近くも議会に姿をみせない傲慢さをも示しえた時の宰相であり、[20] したがって両者は、そのおかれた立場からしておのずと行動様式を異にするとは言え、両者の政治家としての姿勢と、その基本的な思考様式はそれ以上に異なり、対決を顕現化したのである。

さて、ボールドウィンのロイド・ジョージ批判は、右にみたように、政治家としての性格的相違による心理的違和感を梃子として、眼前に展開する政治的腐敗に警鐘を打つこと、これだけに留められたのではむろんなかった。それは、混乱の時代に対応しようとしたロイド・ジョージの政治指導が、その斬新な問題意識にもかかわらず実は充分に状況に対応できず、むしろたえず政治的不安定を招来せざるをえなかった事に対する根本的な批判として展開する。

「腐敗の構造」をもふくめた、この恒常的な政治的不安定との対決こそが、以後二〇年代を通じてボールドウィンに貫ぬかれる一貫した政治的姿勢となるものであり、したがって、かれのロイド・ジョージ批判の展開のなかに、戦後イギリス保守党が採用する政治的基調の歴史的発端が見い出されると言っても過言ではないのである。それでは、ボールドウィンによるロイド・ジョージ批判のより積極的な根拠とは、一体なにか。

その一つは、ボールドウィンが「常態への復帰(リターン・トゥ・ノーマルシー)」とも呼べる思想にもとづき、徹底して政策の基調を国内政策、ことに経済政策におく姿勢をとった事に求められよう。これは、かれが産業人としての経歴を生かしながら、戦中・戦後を通じて、いち早く戦後経済がたどるであろう混乱を予測し、しばしば警告を発してきた事[21]に明らかであった。一九一九年六月、『タイムズ』に当時のかれのポスト大蔵省財務次官(Financial Secretary to the Treasury)の頭文字をもじり、F・S・T、と言う匿名で書簡をよせ、財政問題に関する危機を訴えた事[22]なども、かれの周知のエピソードの一つである。もっとも、この書簡のなかで、かれはみずから私財の五分の一を国家に寄付する事を明らかにしつつ、秘かに富裕階級がこれに続く事を期待し、国家財政の困窮を救おうとするなど[23]、政治家としてはあまりにも理想主義的な未熟ぶりを露呈した様に思われる。しかし以後、ロイド・ジョージが国内問題をボナー・ローにまかせきりで外交交渉に飛び回る事などを考えると、戦後政治についての基本的な問題意識において、両者に相当の懸隔があった事は確かであった。二一年商相就任後も、かれは保守党の伝統的な政策的立場、保護貿易論を踏襲して産業保護法[24]の通過に努力し、転換期に要請された政治指導者像のありかたを、経済指導と言う形で遺憾なく明示した。この法案の通過自体は、歴史的に自由貿易論を掲げてきた自由党に多大な打撃を与え、政治的には「連立内閣」の一方の柱を崩す結果をもたらした[25]。しかし、ボールドウィンの目的は、始めから単なる自由党攻略と言う次元に留められて

いたのでは決してなかった。それは、保守党議員にとくに顕著にみられたような、経済的指導性復権の渇望を癒し、[26]たとえ充分でなかったにせよ、政治的不安定の原因に真正面から対決すべくとられた行動であったのである。「ボールドウィンも一度は尊敬した奇術師ロイド・ジョージは、一九一八年以後まことに安易な政治方法をとった。かれは社会改革の機会をすてさり、政府を産業上の混乱から脱出させるのに譲歩にたより、自分の本物の経済的才能を軽視し、けばけばしい国外での勝利に没頭した。ボールドウィンは、あらゆる困難に対応できる救済策として、帝国内貿易の妥当性を確信するエイマリーに、恐らく完全には組しなかったけれども、しかしかれは、連立派自由党が暗黙にむしろ積極的に、結局は産業保護政策をとるに至った政府を防害しようとしたこと、これに憤慨した[27]」のである。言い換えれば、経済問題と言う地味ではあるが、しかし緊急に解決されるべき国内問題を、まず俎上にのせ、それに真剣に取り組むと言う基本的態度の確立が、かれにとっては焦眉の急とされたのである。[28]

このようなボールドウィンの姿勢が、よく指摘されるように、かれ特有のいわば「和解の哲学」にもとづいていた事は言うまでもないであろう。失業の累積や企業における深刻な緊張関係など、荒み切った戦後社会を放置し、政治的不安定の素因を取り除く努力を怠たれば、ディズレリーの言う「二つに分裂する国民」の悲劇はますます容易ならないものとなるにちがいない。だからこれを防ぐためには、何よりも労働者階級との戦闘を終息させ、かれらに対する真剣な宥和を展開する事が必要なのである。かれはこう考えたのである。[29]ボールドウィンは、むろんこの主張に関しても、当時必ずしも雄弁であったわけではない。商相就任当時のゼネ・ストの危機（二一年四月一五日「ブラック・フライデー」Black Friday）にみられるように、かれはその不慣れのゆえに、ロイド・ジョージのやり方をただ黙って見ていただけであったから。しかし、このボールドウィンの当初の「沈黙は、必ずしも同意を意味しなかった[30]」。

むしろそれは、首相に対する不信の深化をもたらしただけであったのである。しばしば、ボールドウィンと話す機会をもったG・M・ヤングは、かれのこのような態度についてふれ、「イギリス労働者の頭上に官憲の警棒が振りおろされる時が、社会革命の開始を告げるときである、と言うトロツキーの言葉をボールドウィンが知っていたかどうか、わたしは知らない。しかしわたしは、たぶんボールドウィンが(逆の意味で)この言葉に同意したであろうと考えている」[31]と説明している。かつて一九一一年リヴァプール・ストライキに際して、自由党政府がこれを戦艦と軍隊の派遣によって鎮圧しようとした際、栄光に輝く時の「改革者」ロイド・ジョージは、一度はこれをするのにひるんだ。しかし戦後、かれはしばしばこれと同じ事を行い、労働者との対決に必ずしも神経質ではなくなっていたのである。[32]しかも、そのかしこすぎる労使間の仲裁や複雑極まるタクティックスは、なんら状況の緩和に寄与せず、さらにその全体としての反社会主義と言う消極策は、なんら基本的な解決策とはなっていなかった。ボールドウィンが批判するのはこの点であり、その批判の根底には、あくまでもディズレリーの哲学に立脚して、事態を迅速に終息しなければならないと言う危機感が存在していたのである。ボールドウィンにおいて「平穏への願いは、ボナー・ローが次の選挙に保守党の標語として掲げる以前から活性化していた」[33]と言うことができよう。

しかし、「二つの国民」の分裂の危機を効果的に克服するのに、当面要請される最善の策とは、一体何なのか。それは、結局は政府に対する批判勢力としての野党の役割を、議会のなかで正当に保障しうる制度を復活し、もう一度、安定と信頼にもとづく責任政府を構築することではないのか。言い換えれば、それは政治的不安定の起因たる「連立内閣」の存在そのものを否定し、政党政治と言う昔の原則に復帰する事ではないのか。ボールドウィンは、このように考えさらに[34]ロイド・ジョージ批判の中心課題に進んでゆく。ふたたび、G・M・ヤングによって若干敷衍すれば、

それは次のようなものであった。当時われわれは、ボールドウィンとともに繰り返し政党の本質、首相と閣僚との関係、内閣と議会との関係などを検討した。しかしかれは、現在行なわれているこれらのどの点に関しても批判的で、一九一八年の不名誉な選挙によって生みだされた「連立内閣」とロイド・ジョージ指導下の政治は誤謬にみちている、と主張した。[35] ……諸政党の混乱を前に、現状打開の道として「連立内閣」に期待しうるものは何もない。「一言でいえば、われわれは強力な一握りの徒党による政治（the Inner Ring）の影響の下から、責任ある議会政治に帰らなければならないのである。クライドサイド派やショップ・スチュワードや社会主義知識人が何と言おうと、これこそ労働組合が実際に理解しえたものであり、それゆえに実際に好意的に迎え入れたものであり、かつ現実に理解しながら活用するだろうもの」[36]だからである。G・M・ヤングによれば、こうボールドウィンは考えたのである。たしかに「連立内閣」は、一党独裁をめざし野党の存在を容認しないと言うものでは決してなく、すでに述べたように政党政治の機能上の一時的停止を意味するにすぎなかった。[37] また、その成立の背景には、当時みられたような野党の組織上の混乱があり、したがってそれは一定の必然性の上に構築されたものであった。[38] しかしそれにもかかわらず、これが有権者大衆の要求を効果的に議会に反映するのに著しい制限を伴ったのは避けがたい傾向であった。換言すれば「連立内閣」の下での野党は、国家的規模での危機への対応を暗黙のうちに協力させられるゆえに、議会を通じて政府の恣意を掣肘する機能を現実的にはたしにくく、デモクラシーにかかわる大衆の挫折感を補償するものとしては、大きな陥穽に落ち入らざるをえなかったのである。ボールドウィンが「連立内閣」を批判するのは、この意味においてであり、その批判の根拠は、原則なき政治による議会主義崩壊の危機を回避し、あくまでも政党政治にもとづくデモクラシーの復権を唱導すると言うことにほかならなかったように思われるのである。

こうしてみると、ボールドウィンにおけるロイド・ジョージ批判は、なによりもその内政と外交の乖離に注目し、ひとたび傾斜した政府の外交重視の姿勢を国内政策の強化によってもう一度復元し、あくまでも「政治的安定化」を追求することにほかならなかったと言う事が理解されよう。のちにカールトン・クラブ集会の席上、ボナー・ローが保守党議員を前にして述べ、自分は「労働党政府の出現に少しの恐怖感も抱いていない」[39]と言い切ったように、もともとボナー・ローや政治的にはボナー・ローの近くに位置していたボールドウィンなどは、保守党内においても労働者大衆をいかに馴致させるかに政策的視点を定めようとしていたのであり、その当面の政治的目標もすぐれて「常態への復帰」と言う課題に収斂されつつあったのである。制度上の問題に関しても、かれらが基本的には「連立内閣」による政治よりも政党政治を好んだのは当然であったと言えよう。ただロイド・ジョージと言えども、「安定」を無視していたわけでは決してなかった。ロイド・ジョージにとって混乱の鎮静化は、ヨーロッパにおける政治的不安定の解消と密接に関連しており[40]、したがって外交上の努力は一日たりと言えども等閑に付されて良いものではない、と考えられたからである。さらに混乱は、「連立内閣」の経験を生かした新しい政治的な核としての「中央党」結成によって解消できるにちがいない、と考えられたからであった。だが繰り返えすまでもなく、ロイド・ジョージの構想はあまりにも早急にすぎ、その失敗は誰れの目にも明らかになった。ボールドウィンの批判したのはこの点であり、かれの政治的目的はこうした政治的志向性を断ちきり、あわせていま一度トーリー・デモクラシーを保守党の政策的基調の中心にすえることであったように思われるのである。

ボールドウィンのロイド・ジョージ批判は、こうして次第に明確な輪郭を描いていった。むろんこの輪郭が描かれたプロセスは極めて緩慢であった。しかし、残されたものは、もはやかれみずから沈黙を行動に移す事であり、い

ずれにせよ袋小路に落ち入りつつある状況の争点を明らかにし、解決への展望を切り開くため、まず「連立内閣」からかれの属す保守党を分離する具体的な行動をとる事であった。ボールドウィンは、後年ゼネラル・ストライキ（一九二六年）に際しても、エドワード八世廃位問題（一九三六年）に際しても、政治的決断を躊躇した事はなく、「正・邪にけじめをつける判断に関して、決して気迷いする事がなかった」[41]と言われている。しかし、なおかつかれは、頑固な防禦型政治家であり、行動に踏み切るのにつねに機敏な動き方を示したと言うわけでは決してなかった。しかも、当時かれが社会的に無名であったと言う理由以上に、いまなお一部の保守党指導層に根強い支持をえている「連立内閣」継続論は、ボールドウィンの行動に大きな障害を与えるであろう。だが、かれのロイド・ジョージ批判に関する確信は、いささかも揺がなかったように思われる。なぜなら、かれは時代はすでに当初の感激から醒め、不安定なカリスマ的政治指導に宿酔感を催していると判断していた[42]からであり、もしもロイド・ジョージと「連立内閣」打倒に失敗するなら、そこには「独裁制の恐怖――つまり一つの政党を除くあらゆる政党の崩壊」[43]が待ち構えるだけであると考えたからである。

五、カールトン・クラブ集会

ボールドウィンが、現実に「連立内閣」打倒の行動を開始したのは、すでに述べた近東問題――チャナク危機が重大な局面に入ってからであった。ロイド・ジョージの政治指導と「連立内閣」の矛盾は、一八年以降いろいろな形をとって現われ、人々の疑惑を深めた。しかしチャナク危機は、それらの矛盾を一挙に露呈させたかの観を呈し、これがボールドウィンを最終的にロイド・ジョージから離反させる契機となったのである。

けれども、これもすでに触れたように、ボールドウィンはチャナク危機が進行しているあいだ、実は健康をそこね、医者から公的な活動をすることはおろか活字を読むことすら禁じられていた。かれがチャナク危機の緊迫化とイギリスの参戦の可能性を知ったのは、妻ルーシー(Lucy Baldwin)とともに療養をおくっていたフランスのエクス・レ・バンにおいてであり、そこでふと目にした一枚のビラからであった。閣議召集の通知も受けず、また事態の成り行きについてなんらの報告も受けていなかったかれにとって、(44)これは衝撃であった。ビラをみた翌九月二八日、かれはエクスの山々を歩き何事かを考えている。さらに翌二九日には、妻と散歩の途中英字新聞を買いもとめ、依然として事態が好転していないのを知りなお焦燥感を深めている。しかしその夜、ボールドウィンはロンドンから帰任をうながす一通の電報を受けとり、遂に行動を開始した。かれはルーシーに言った。「とうとうくるものがきた。自分はこれをずーっと待っていたのだ。事態は楽観を許さないようだが、とにかく帰ってかわいそうなオースチン(チェンバレン)を助けなければならない」。(45)翌三〇日朝、かれは妻をエクスに残したままロンドンに出発し、ほとんど一昼夜をかけ長駆し、一〇月一日の朝一〇時四五分から始まる閣議に姿を現わした。(46)ここから、かれの奮闘が始まったのである。

一〇月一日の閣議において、ボールドウィンが目撃したものは、いわば「内閣」の完全な分裂であった。この時までにトルコ軍は、C・ハリントンの率いるイギリス軍の包囲を完了しており、この現地の緊迫した事態の対応をめぐって、ロイド・ジョージ、バークンヘッド、チャーチルなど対トルコ強硬派とカーゾン、グリフィス・ボスカーウエンなど和平派がともに譲らず、真っ向から対立していたのである。(47)ビーヴァブルックによれば、このときのボールドウィンは、状況の推移に応じて二度態度を決したと言われている。すなわち、はじめは戦争が不可避であると考え、不承不承、政府の政策の支持を決意したこと。しかしついで、こうした事態をまねいたロイド・ジョージとの訣別の意

を固めたと言うことであった。[48] もとより、ボールドウィンのこうした微妙な心の動きを明らかにすることは、いまとなっては全く不可能であり、ビーヴァブルックの回想の真偽を確かめる手段も存在しない。しかしながら、ボールドウィンが戦争を嫌悪し、したがってロイド・ジョージなどによる一連の外交政策に激しい闘志を燃していたのは確かであった。一〇日一日以来、少なくともかれはカーゾンの屈強な援軍として登場しており、その反ロイド・ジョージの立場は、誰れの目にも明瞭であったのである。[49] ボールドウィンにしてみれば、対トルコ強硬策の是認は、結局はロイド・ジョージと「連立内閣」の政治的延命を承認することを意味し、これは決して妥協できる性質のものではなかった。かれは数日後妻に語った。「W・チャーチルとロイド・ジョージは、これまでつねに戦争に賛成の立場をとってきており、『キリスト教徒』の『マホメット教徒』に対する戦争を遂行し、トルコをヨーロッパから追放するために、わが国を戦争に突入させようと画策したのだ。そしてかれらは、その余勢を駆って直ちに総選挙に訴え、議会を解散するつもりなのであろう。それは恐らく、かれらにさらに数年間政権を握らせることになると計算されているのだろう」。[50] ボールドウィンは、とりあえずこのように首脳部の意図を押しはかり批判していたのである。

ボールドウィンがロンドンに帰った数日後、チャナク危機をめぐって、さらに特筆されるべきことが起った。それは、ボールドウィンやカーゾンの動きとは別に、ボナー・ロー自身が政府批判に踏み切ったことであった。ボナー・ローもまた、ボールドウィン同様病気のため逼塞していたが、しかしかれも政府の近東政策を座視できず、一〇月七日の『タイムズ』に書簡をよせ、おおよそ次のように政府批判を展開した。すなわち、情勢をみてみるとたしかにトルコ軍のコンスタンチノープル突入とトラキア進入は現実化しており、再びバルカンに戦争の勃発する可能性が強くなった。だからイギリス政府が、こうした事態を防止しようとすることは、基本的には正しい。だが、コンスタンチ

ノープルとバルカン諸国において戦争を防止することは、イギリスだけの利害にかかわることではない。ダーダネルス海峡における航行の自由を保持することも、またイギリスだけの利害にかかわることなのである。「それでは、このような条件において、われわれのなすべきことは何か。明らかに、傘下国にきわめて数多くのマホメット教徒を含んでいるイギリス帝国は、トルコに対していかなる敵意も不正も示すべきではないのである。カーゾン卿がパリで同盟国と結んだ協定においては、さまざまな提案がトルコに対して示された。それらは、かれらに対して決して不正なものではなかった。わたしの意見は、連合国はこれらの提案にもられた諸条件を逸脱して行動すべきではないと言うことなのである。……わたしには、わが政府のとるべき行動の進路は明白であるように思われる。われわれのみが、世界の警察官として行動することはできないのである[51]」。

ボナー・ローのこの書簡が、政界に大きな波紋を投げかけたことは容易に想像されよう。ことに保守党の一般議員にこれが与えた影響は大きく、かれらのロイド・ジョージに対する批判は、この書簡の公表によって一層強められたかのようであった。そしてそれは、さらにレーン・フォックス(Lane Fox)がボナー・ローに対して、「われわれすべてにとって何よりも喜ばしいことは、貴下が指導者として復帰することである[52]」と述べたように、ボナー・ローをもう一度保守党指導者として戴く気運を党内に生みだしたのである。この意味で、「ボナー・ローの書簡は、連立内閣を弔う葬送の鐘の音であった[53]」と言って言いすぎではなかった。復帰を期待されたボナー・ロー自身も、言うまでもなく情勢に対して深い危機感をいだき、近東政策のゆくえはアイルランド問題より爵位売買問題よりもっと重大な要素をふくみ、保守党が分裂するとすれば、それは結局この問題をめぐってであるにちがいないと憂慮していた[54]。けれども、ボナー・ローの政界復帰は健康上の理由によって極めて困難であり、かれ自身も非常な躊躇をみせていた。

これより一年後に、かれは癌のため病没することになる。[55] もとよりそれは、いまかれの知るところではない。しかし、いずれにせよ再び政局の収拾に立つかどうかにはなお大きな決断が必要とされたのである。

ところで、ボールドウィンの当面とるべき行動は、言うまでもなくチャナク危機をいかに回避するかと言うことにほかならなかったが、しかしそれと同時に、この段階においてふたたび台頭した「連立内閣」首脳部による早期総選挙実施策をとりあえず阻止することも、かれにとっては重要であった。実はすでに九月一七日、チェンバレンやバークンヘッドなどは、ロイド・ジョージやチャーチルとともにチェッカーズに集り、情況を先取りすべく迅速に総選挙を断行することを内定していた。[56] 二一年の暮から二二年一月にかけてロイド・ジョージが考えたように、かれらは総選挙に突入することができれば、チャナク危機を契機として跳梁する批判分子を充分に説得することができるだろうし、「連立内閣」派のイニシアチブのもとに、再び混迷する政局を収拾することができるかも知れないと考えたのである。[57] かれらはそう考え、保守党員閣僚による会合でこの案を明らかにし、さらに一〇月一〇日の閣議に同案を提出した。[58] ボールドウィンが断乎たる態度を示したのは、まずこうした党首脳の意図に対してであった。一〇月一二日、フランスの療養先からおくれて帰った妻をヴィクトリア駅に迎えに行ったボールドウィンは、その帰途妻と二人で歩きながら、この間の事情について語り、彼女に次のように説明した。「保守党員閣僚による会合で総選挙を挙行することが決められ、（党のどの部分にも相談せず）直ちに連立内閣支持の旗印を掲げて、ロイド・ジョージのもとに国民の総意を問うことが決定された。そこで自分は立ちあがり、かれらに言ってやった。自分だけはそんなことはできないし、またするつもりもない。自分は自由でありたいし、（もし総選挙になれば連立内閣派とは関係なく）一保守党員として立候補する。もはや自分は、ロイド・ジョージのもとでは仕事はできないのだと。党員閣僚たちは皆あっ

けにとられていたけれども、明らかにかれらは、すべて自分の意見には反対であった。その次の保守党員閣僚による会合では、ボスカーウエンが自分と運命を共にしはじめ、カーゾンもまた同情を示した。しかしそれがすべてであった。こう言う次第なのだ。あとは皆ロイド・ジョージについてゆくことになるのだろう。しかし自分にはそんな事はできない。まことにこうした態度をとることは、自分が政界から完全に脱落するだろうことを意味しているのだが」[59]（はじめのカッコは原文どうり）。いずれにせよ、ボールドウィンは総選挙による乗り切り策を画す党主流の意図を危険視し、これに抵抗した。かれは覚悟をきめ、チェンバレンにすべてを党議にかけるよう要求するとともに、ロイド・ジョージとの訣別を訴えたのである。[60]

このときの政治家ボールドウィンの強みは、大局的に考えれば、かれが必ずしも政治的に孤立しておらず、次第に台頭しつつある一般議員（バック・ベンチャーズ）と共感をともにし、閣外閣僚や次官クラス議員など若手の政治家と同一歩調をとりはじめていた点に求められよう。近東問題が紛糾して以来、党内対立のパターンは従来のそれとは様相を一変していた。それは、党派単位ごとのいわばタテ型の分裂として現われるのではなく、むしろ次官クラスの政治家などに率いられた一般議員と党指導部の対立と言うようなヨコ型の分裂として現われるところに特徴をみせていた。七月と八月における若手政治家たちと党指導部との会見において、[61] チェンバレンやバークンヘッドが、「驚くべきほど傲慢で攻撃的な態度」[62]を示し、党内に指導部への不信を拡大したことなども、この新しいタイプの対立を進める重要な契機になったと言ってよい。したがって、ボールドウィンがいま反ロイド・ジョージの立場を示したと言うことは、意識すると否とにかかわらず、かれが客観的にはこうした一般議員の政治的な流れに乗りつつあったことを示唆しているのである。ボールドウィンはいったんは辞任を決意した。しかしたとえばエイマリーが、それを一六日に開かれる予定の保守党

員閣僚による会合まで延期するよう説得しえたことなどを考えると、ボールドウィンの行動は決して孤立していなかったことがわかるのである。[63]

しかしボールドウィンには当然弱さもあった。それはこのようにみずから党指導部に対する批判の烽火をあげ、しばしば多くの一般議員と意見を同じくしながらも、しかしなおかれには党内の批判勢力を「反乱」にまで結束させる力量がなかったと言うことである。チェンバレンも、ボールドウィンの動きに対してはまったく警戒の色をみせなかったし、むしろかれの抵抗を軽視する様子さえみせている。[64] もとよりボールドウィン自身、自分の力のなさを充分に承知しており、したがって党指導部への抵抗に踏み切るに際しても、悲壮な決意をみせていたのである。右に述べたヴィクトリア駅からの帰り路、かれは同じく妻に言っていた。「君に相談せず自分は何か恐ろしいことをしてしまった。かまわないだろうね。まったく悩まされたのだが、しかしいずれそう言う事になるとは思っていたのだ。いま内閣に辞意を表明している。もう二度とそうした地位につくことはないと思う……」。[65] 繰り返すまでもなく、政治家ボールドウィンにしてみれば、党指導部に対する抵抗は権力にかかわる初めての決断であり、かれはその結果について全く自信をもてなかった。客観的には有利な立場にたちながら、しかしなおかれは、みずからの決断に戦慄していたのである。このようにして、ボールドウィンの強さと弱さは、かれが党指導部の批判の大きな流れに身を委ねながら、しかし自覚的に全体を掌握するまで成熟しきっていなかったと言う点にもとめられよう。したがって、当面チャナク危機を回避し総選挙の画策を阻止するためには、別の指導者の出現が期待された。それはボールドウィンにとっても、ボナー・ロー以外存在しなかったのである。

さて、この間政局は次第に緊張の度を加え、事態の収拾をいよいよ困難にしていった。一〇月一三日には、チェ

ンバレンがバーミンガムで演説を行ない、政府の近東政策を説明するとともに、労働党の台頭に対抗しうる「連立内閣」の堅持を訴えたが[66]、しかし必ずしもこれによって緊張の緩和がえられたわけではなかった。さらに翌一四日には、ロイド・ジョージがマンチェスターにおいて演説し、「われわれは平和に至る確実な、ただ一つの道程をたどってきたし、すでにそれに到達した[67]」と強気な態度を示したけれども、しかしこれによってしても政局混乱の鎮静化がもたらされたわけではなかった。カーゾンなどはこの演説に激昂して、ロイド・ジョージに辞表を提出したぐらいであったのである。そして、ここで指摘しなければならないことは、実にこうした緊張と混乱を導びく争点の中心が、もはや近東政策などの個々の政策から離れ、ロイド・ジョージの政治指導と「連立内閣」の継続そのものの可否をめぐる、より根本的な問題に移っていったと言うことであろう。チャナク危機自体は、すでに述べたように司令官ハリントンと高等弁務官H・ランボールド(Sir Horace Rumbold)の気転によって一〇月一〇日頃一応の回避をみ、さらにその後のトルコ側との現地交渉によって妥協点に達しつつあった[69]。しかしそれゆえにこそ、保守党内部においては、「前後の見境いない軽率さによって、イギリスをほんのもう少しで戦争に巻き込むところであった[70]」連立内閣に対する批判が、一層激しく燃えあがったのである。

「連立内閣」の首脳たちも、政局運営に関してなお自信を失ったわけではなかったが[71]、事態の収拾には苦慮していた。一〇月一五日には、「連立内閣」派の主たる指導者全員がチャーチル邸の晩餐の席に列なり、情勢を検討している[72]。この席には、カーゾンも招かれたが、しかし前日のロイド・ジョージの演説に強い反発をみせたかれは、当然に出席を拒否し抵抗の構えを示した[73]。ただ、この席には反「連立内閣」派のL・ウィルソンが一人出席し、総選挙の不当なことを訴え、すべてを保守党大会の審議にゆだねるべきであると主張して、並み居る「連立内閣」派閣僚と激論

を続けた[74]のである。そしてカールトン・クラブにおける集会が設定されたのは、実はこの激論のなかからであった。と言うのは、ウィルソンの主張に対してチェンバレンは、もしこれが党大会などでとりあげられるようなことになれば、自分の支持者たちも黙っているようなことはないであろうし、したがって党は完全に分裂することになると反駁した[75]。しかしウィルソンは譲らず、結局チェンバレンがウィルソンに歩み寄り、この問題を党大会においてでなく、議員集会で検討することで妥協したからである[76]。かくて、一九日にカールトン・クラブへ全保守党議員が招集されることになった[77]。いよいよ「連立内閣」の継続か否かをめぐり激突の場が設けられたのであった。

ボールドウィンにとっては目まぐるしく、かつ緊張にみちた日々が続いた。このときの政局の雰囲気について、ビーヴァブルックは書いて、「一五日の日曜から一九日の木曜にかけて、抗争は、闘争と言うよりも個々の決闘が連続して行なわれたような形になった。……ダウニング街から（政治家たちに）さまざまな約束・昇進・叙勲がちょうどベンチからホースで芝生に水をまくようにまき散らされた[78]」と表現しているが、ボールドウィンにしても重要なのは指導部に対抗しうる多数派の形成であった。一三日、かれはボナー・ローに事態収拾に立ちあがるよう説得したが、失敗した[79]。しかし一四日、かれは次官クラスの政治家たちが自分と行動をともにすることを知り、喜んでこのことを妻に語っている[80]。ボールドウィンには、翌一五日かれがブライトンに行き呻吟しながら砂丘を逍遙したことにみられるように、なお必ずしも明るい展望があったわけではなかった[81]。しかしこの頃より、かれの周辺には多くの同志が集まり始めている。カーゾン、ボスカーウエンの外にエイマリー、P・ロイド・グレイム（Philip Lloyd-Greame）、E・ウッド（Edward Wood）、L・ウィルソン、G・ヤンガー、J・C・C・ディヴィッドソン、S・ホアー（Samuel Hoare）などである[82]。S・ホアーは、ボールドウィンの内諾をえて翌一六日の『タイムズ』に掲載するチェンバレン

攻撃の書簡を用意した。[83] 一六日にはエイマリー邸にL・ウィルソンをはじめとして一七人の次官クラス政治家が集り、チェンバレンにあらためてかれらの要求をつきつけたが、チェンバレンはこれを「陰謀」ときめつけ、対決の色を濃くしただけに終った。[84] 反「連立内閣」派の人々は皆ボナー・ローの存在を思い、かれの出馬を願った。[85] この日、ボールドウィンは「ほとんど眠れず悩んだ。電話が頻繁にかかってきた」。[86] 一七日、情況はどんどん進んだ。ソールズベリ始めダイハーズの動きも活発にみられた。この朝ふたたび次官クラスの政治家による会合がもたれた。この席には、ボールドウィン、ボスカーウエン、G・ヤンガーが加わり、席上ボールドウィンが簡単ではあったが不退転の決意を披瀝した。[87] エイマリーの判断では、かれらの陣営にはなおS・ホアー以外にE・プレティマン(Ernest Pretyman)など一般議員(バック・ベンチャーズ)を代表する人物と、それに保守党上院幹事長のディヴォンシャー(9th Duke of Devonshire)やダービーも加わるであろうと予想された。[88] しかしボールドウィンの厳しい態度表明にもかかわらず、なおボナー・ローなしで戦うことに動揺の色をかくさない人々が存在したように、[89] あくまでも楽観は許されなかったのである。この日も、ボールドウィンはどこか意気消沈しているかに見えたし、同夜また眠れぬ夜をすごした。[90]

一八日、ボナー・ローに対して反「連立内閣」派による最後の働きかけが行なわれた。同日の朝、ダイハーズのグレトンがかれを訪ね出馬を要請したほか、[91] S・ホアーが訪問して説得にあたり、さらにボールドウィンが説得を重ねた。[92] ボナー・ローにとっては健康問題が依然として重大な障害になっていたが、それ以外にも党活動に対する義務感と静謐な世界へ逃避することの願いとの葛藤に悩み、かれはなかなか決断を下せなかった。[93] このボナー・ローがなぜカールトン・クラブ集会への出席を決心するに至ったかと言う問題は、今日必ずしも明瞭ではないように思われる。しかしかれは、結局は出席の決意を固めるに至った。それはもともと党の分裂を恐れるかれが右のような反「連立内

閣」派の人々の説得に刺激されたからでもあり、また同時に同日S・ホアー邸に集った七四人の一般議員[94]の動向に、大いに心を動かされたからであった。チェンバレンとは違い、つねに一般議員の動向を重視し、一般議員のなかに活動の起点をおいていたボナー・ロー[95]にとっては、後者の動きは決定的であったのである。いずれにせよ、同夜「かれはパイプに静かに煙草をつめ、そっけなく言った。『わたしは、集会にでよう』。まことに劇的な瞬間であった[96]」。このニュースは、別にボールドウィン邸に集まっていた数多くの次官クラス政治家たちを興奮させ、ボールドウィンにも自信を与えた[97]のである。

カールトン・クラブ集会は一〇月一九日に開催されることになっていた。この日『タイムズ』や『デイーリー・エクスプレス』(*Daily Express*)など多くの新聞が、同集会と保守党の将来について大きく紙面をさいたことなども影響してか、会場周辺には早くから多くの人々が集まり慌しい空気が流れていた[98]。群衆の見守るなかを、まずいち早くダイハーズの議員たちが姿をあらわした[99]。つづいて、議員たちが連れだって入場するなかを、ボナー・ローがダービー、サイクス(Sir A. Sykes)それにディヴィッドソンとともに到着し暖かく迎えられた[100]。しかしカーゾンは欠席し姿をみせなかった[101]。遅れてチェンバレンがリー(Lord Lee)とR・ホーン(Sir Robert Horne)とともにあらわれた[102]。舗道からこれをみていたビーヴァブルックによれば、このとき群衆から罵声がとび、ある婦人はチェンバレンを「ユダ!」と呼ばわったと言う。バークンヘッドに対してもまた同様の態度が示されたようである[103]。いずれにせよ、こうして出席した二七四名[104]の議員によって、現代保守党史において最も重要な意味をもつ集会が開かれることになった。

なおここで、これから始まる集会の結末をあらかじめ予測させる重要な事実が、同日の朝、明らかになったことにふれなければならないであろう。それは、注目されていたニューポートにおける補欠選挙の結果が、保守党の単独勝

利におわり、[105] いかなる形になるにせよ保守党を独立させようとしている反「連立内閣」派を、ここで大いに鼓舞したと言うことである。もともとチェンバレンなどは、むしろ秘かに同補欠選挙で保守党候補者が敗北することを期待していた。もし労働党が勝利すれば、社会主義に対する防波堤としての「連立内閣」の重要性が、集会に参加する保守党員によってあらためて評価されるだろうと考えたからであった。しかし結果は逆にでた。[106] ボールドウィンの友人W・スティードの率いる『タイムズ』が、同日の朝刊において「このニューポートにおける結果は、保守党の解放として喝采を受けるだろう」[107] と書き、側面から「連立内閣」を攻撃しえたように、それはカールトン・クラブに集まる反「連立内閣」派議員を勇気づけ、党指導部には極めて不安な影を落していたのである。もとより、これから始まる集会について、その最終的な結果を断言できるものは誰一人としていなかったけれども。

さて、集会は一一時に開始された。まずチェンバレンがカーゾンからの欠席を知らせる手紙を読みあげ、開会を告げるとともに、みずから情況に対する執行部の見解を明らかにした。

チェンバレンは要約するとおよそ次のように発言したのである。すなわち、(一)過去数ヶ月間、党執行部は党の一致団結した支持をえられず過重な負担に悩んできた。党内からの支持の欠如は、ことに政府が戦争の可能性をふくむ重大な外交的危機を前に野党から嵐のような批判と攻撃を受けた際に浮き彫りにされた。もとよりわれわれは、この危機を回避した。しかしいまや、われわれの権威が弱体化したことは否定できない。(二)こうした党執行部に対する批判は、外交上の問題に限定されるものではない。しかも重要なことは、これらの批判が、党内のさまざまな集団や派閥において語られ、不毛な議論ばかり続く政治環境を生みだしていることである。それは政府の行動を制約するばかりでなく、国家の安全さえ期しがたくしている。したがって、われわれは、この際直ちに総選挙に訴え、状況をたて直

すべきであると言う結論に達した。㈢ところで、今日われわれの前にはこれまでとは違った新しい局面と争点が存在していることに注意しなければならない。それは、わが国全体の産業及び商業を基礎づけた基本的な社会原則が、労働党によって脅やかされていると言うことである。争点は資本課税、巨大産業の国有化、市民の労働の権利、市民の扶養の義務というイギリス経済にとってはきわめて危険な次元にまでおよんでいる。㈣したがって、選挙に際して必要なのは、あくまでも労働党に対する防波堤としての「連立内閣」を守ることである。「旧友たち（連立派自由党）との絆を断ったり、われわれすべてにとっては自明である主義主張を防衛するために結合しえた諸勢力を分散させると言うような時ではないこと、このことはわれわれにとって明らかである。わたしは調査したのだが、現在の盟友たちと行っている政党の協力関係を確実にしえないのであれば、われわれは事実上の多数派を形成することも、強力な政府を構築することも不可能であるだろう」。重要なのは、あくまでも「今日まで協力し合ってきた人たちとの協力関係を保たなければならない」と言うことなのである。チェンバレンは集会に出席した議員たちを前にして、おおよそこのように主張したのであった。[108]

しかし、このチェンバレンの発言は、これを見守った議員たちからは冷やかに受けとめられたと言ってよいであろう。発言ではロイド・ジョージの進退に関して一言も触れられていず、また保守党は連立派自由党と一体どこまで協力するのか、はたして執行部は近い将来保守党と連立派自由党の合同に踏み切るのか否かなどの諸点について何らの言及もなされず、著しく説得力を欠いていたからである。[109] いずれにせよ、チェンバレンは発言と同時に明らかに孤立し始めた。この集会の雰囲気について、多くの人々にしばしば引用されるS・ホアーの回想によると、かれの発言は少なくとも次のように受けとめられたのである。すなわち「それは、教室でがみがみ言う始末に負えない教師の叱責

のようなものであった。かれが保守党とロイド・ジョージとの間には何らの違いもないと述べたときには、（会場には）ブーブーと言う不平の声が大きくまきおこった」のであると。[110]

チェンバレンにつづいて、ボールドウィンが起立して発言した。かれは激しい闘志をみせ、次のように述べた。若干長くなるが、発言の主要部分を引用してみよう。

「いま諸君の前に、閣内における少数意見を、すなわちわたし自身とアーサー・ボスカーウエン卿の意見を明らかにすることは、わたしの義務である。……ところで、チェンバレン氏が述べられたことからすれば、連立内閣に加わることは極めて容易であるが、しかし一度加入すれば、その連立内閣は永続的なものになるだろうとわたくしには思われる。なぜなら、そうなれば諸君はいまに連立内閣を後々まで存続させるべきであると考えるようになるであろうし、連立内閣を放擲することを罪悪視するようになるだろうからである。のみならず諸君は、連立内閣のおこなったさまざまな行為の責任を免がれたいと考えているからである（つまり連立内閣を放棄すればそれまでの責任をとらねばならなくなると考えているからである）。わたくし自身に関して言うなら、わたくしはその種のことをまったく望んでいない、ときっぱりと述べたいと思う。だから、もしわたしが選挙に際して一人の独立した保守党員として立候補するときには、わたくしは同僚たちと袂を分かつに至るまでのすべてに関して、全面的な責任をとることを有権者に向って完膚なきまで明らかにしたいと考えているのである。しかし結局、連立内閣の本質と言うものは、自発的に形成された組織体と言う点におかれるのであって、諸君はいかなる特殊な（政治）形態にも国民を強制して組み入れることはできない。党が一九一八年に加わった制度を継続するのか否かと言うことを、何ら党に相談せず、選挙を行なうことに合意してしまったこと、これは致命的な誤りであったように思われるのであ

る」。「（ところで、現下の）すべて困難な事柄の根元は首相に存在する。かれは躍動的な力（ダイナミック・フォース）ではあるけれども、現在の紛争は、わたしの考えによればまさしくこの躍動的な力と言う事実から派生した。躍動的な力は、実に恐ろしいものである。それは事の善悪を問うことなしに諸君を激流に押し流してしまうものなのである。以前、首相が所属していた自由党が粉々に分解したのは、まさしくこの躍動的な力と首相の特異な個性のおかげであった。そしてわたしは、いずれ同様のことがわが党にも起るであろうと確信しているのである。……われわれは、過去四年間首相と協力関係を保ってきた。しかしこの間、すでに周知のようにわが党のある部分などは絶望的に疎外されてしまった。だからもし、こうした協力関係が継続するのであれば、またもし本日の集会がこの協力関係を継続させるべきであると認めるのであれば、党の解体化はますます促進されるであろう。このプロセスは、伝統ある保守党（オールド・コンサヴァティヴ・パーティ）が微塵に砕かれ、灰塵となるまで、必ずや促進されるにちがいないと、わたしは信じているのである。……」[111]

ボールドウィンの発言は、わずか八分であった。[112] しかしこの「力のこもった情熱的な」[113] 発言が、集会に集った議員たちに強烈な印象を与え、かれらを大きくゆすぶったことは否定できない。かれはここで、チェンバレンによって繰りかえし主張された「連立内閣」継続論を批判し、かれ一人でも独立した保守党の党員として選挙に打ってでることを示唆したのである。それだけではない。より根元的な問題としては、ロイド・ジョージの政治指導を「躍動的な力」と呼び、変転たえまない転換期においてこそ有効性を発揮したこうした例外的な指導をいま終息させ、安定した時代にふさわしい正統的な政治指導を復権させることをかれは訴えたのである。言い換えれば、それは政党政治そのものを根本的に破壊してしまうロイド・ジョージと訣別する呼びかけであり、あらためて党の団結をはかり、政党政治へ復帰することを呼びかけたものであった。いずれにせよ、政治家ボールドウィンが保守党の重要な集会において、

こうした原則的な問題を決然として展開し、しかも多くの党員を決定的に影響づけたのはこれが初めてであった。翌日の『タイムズ』が、実にボールドウィンのような「地味で控え目な人間が、政治の歴史を作るのに重要な役割を演ずることになったことは予想外のこと」[114]であったと、驚嘆したゆえんであった。

議事はさらに進行した。ボールドウィンが発言を終え会場に衝撃を与えるや、すかさずE・プレティマンが起立し、ボールドウィンの線にそった次のような決議案を採択するよう提案した。すなわち「保守党は連立派自由党と喜んで協力し合うけれども、しかし独自の指導者と独自の綱領をもった独立した政党として選挙を闘う。本下院保守党集会はこのことを宣言する」[115]。ついでレーン・フォックスが起立し、プレティマンの提案に賛成した。レーン・フォックスの主張は、いまや「保守党の歴史的な遺産と原則が存亡の危機」にたたされているのであり、連立内閣によってこの保守党の原則を守りぬくことは全く不可能であると言うものであった。執行部批判は、こうして次第に会場に広がった[116]。つづいて、チェンバレン派のF・マイルドメイ(Frank Mildmay)とダイハーズのH・クレーク(Henry Craik)が、極めて簡単に、それぞれの立場を主張する発言をしたけれども、会場にただよう執行部批判の雰囲気は依然として変わらなかった[117]。そして、これを決定的にしたのが、次に述べられたボナー・ローの発言であったのである。かれは、いささか躊躇しながら、これまでの発言者とは若干別の角度から問題を考えてみたいと言い、語り始めた[118]。それは、ボナー・ローみずから党の団結を訴え、かつ党の独立へ踏み切ることを訴えた画期的な演説であったのである。

ボナー・ローは言った。

「わたしは、数年間、わが党の指導者であった。第一次世界大戦の間、実際わたしは党それ自体についてそれほど深刻に考えなかったけれども、しかしたとえどのようなことが起っても、つねに党を統一した政党として維持し

ようと心底から熱望していた。わたしは、現在でもその願いを変えていないし、チェンバレン氏もまたそうであろうと確信している。けれども――次のように言うことを御許しいただきたい――われわれは、いま抜き差しならぬ分裂に直面しているのである。……」「もしチェンバレン氏の見解がこの集会において承認されることになるなら、その時どう言う事態が生まれるか……。確実なことは、連立内閣の継続に対する批判が強烈なので、わが党は分裂し、かつ新しい政党が結成されることになるだろうと言うことである。しかし最悪の結果はこれにとどまらない。それは分裂によって党内の穏健派と目される人々が党外に去るために、保守党内の残留組がより反動的になるだろうと言うことなのである。わたくしは次のことを申しあげたい。すなわち、これまでわが党には反動的な要素と呼ばれるものがつねに存在しつづけてきた。またそれは現につねに存在しているにちがいない。だがもしこの反動的要素がわが党における唯一の要素であるとするなら、党は絶対に滅亡すると。それゆえ、もし諸君がこの危機に際してチェンバレン氏に同意されるなら、結果的にはわたしの考えたことが起るであろうと諸君に申しあげたいのである」。

「これが現状なのである。もし全体として妥協が不可能であるなら、またもしわたしが述べた考えが不可能であるなら、わたくしは――いまこそわが党を一個の完全な政党として維持する最良の機会であると言う理由からして――わが党が一政党として選挙にのぞみ、勝利のために闘うことに賛成の投票をしよう。たとえ勝利を逃がす場合でも、われわれが団結した保守党として進むことができたなら、少なくともまた機会は残されるであろうとわたくしは考えるのである。こうした理由からして、実に残念ではあるけれども、わたくしは連立内閣反対に賛成投票をしよう」[119]。

こうして集会の大勢は決定された。ボールドウィンに続いてボナー・ローが党の独立を訴え、保守党のたどるべき方向を導いたのである。かつて、ロイド・ジョージとともに手を携えて転換期の困難な事態に対応し、名実ともに「連立内閣」の支柱として行動したボナー・ロー自身がいま「連立内閣」の終りを告げたことは、ここに何人にも効果的な反論を許さない決定的な影響を与えたと言えよう。もとより、チェンバレンを支持する演説が出なかったわけではなかった。ボナー・ローにつづいて起立したバルフォアは、チェンバレンの弁護を試みている。かれは次のように主張した。現時点において保守党と自由党をわかつ決定的な相違は存在しない。保守党と自由党の間には「昔みられたような抗争は存在しないし、新しい対立もまだ現われていない」。したがって、いま重要なのは、「連立内閣」を支えることであり、その提唱者たるチェンバレンを擁護することである。「わたくしは、この集会に対してわが指導者を支えるよう強く訴えたい。わたくしの理解によれば、チェンバレン氏は満場一致でわれわれの指導者として選出されたのであり、諸君が指導者を戴きうる最良の方法は、とりもなおさずかれを指導者として扱うことにほかならない。わたくしの考えでは、この方法によって、またこの方法によってのみ、保守党の諸原則とまた保守主義的思考様式とよばれるものを……保持しうるであろう」[120]。だが、このバルフォアの演説は、もはやほとんど影響力をもたなかったのである。それは党の重鎮の発言であるゆえに一応傾聴された。しかし、その内実は極めてよそよそしいものであり、チェンバレンなどはバルフォアの発言が終るや、いち早く集会を終らせたがり苛立ちさえみせたのであった[121]。

会場では、この後L・ウィルソン、J・F・ホープ(James Fitzalan Hope)、A・S・ベン(Sir A. Shirley Benn)、それにH・セシル(Hugh Cecil)などの簡単な発言が続いた。L・ウィルソンのそれはボールドウィンやボナー・

ローの発言の繰りかえしであり、J・F・ポープのそれは集会延期の提案であった。保守党の将来に関しては投票で決すべきであると言うH・セシルの発言のあと、ふたたびチェンバレンが起立して発言を求めた。かれは、J・F・ポープにその提案を取り下げるよう要請したのち、プレティマンの提案を投票に付すよう主張した。これに従って投票が行なわれた。結果は次のとおりであった。

提案に賛成……一八七票
提案に反対……　八七票[122]

以上のようにして集会の結論が明らかになったのである。「連立内閣」の継続に反対する議員の声は圧倒的に強く、それはチェンバレンやバークンヘッドなど執行部の意向を完全に葬りさった。それは明らかに、一般議員の不満を背後に決起した若手指導者たちの「反乱」としての色彩を帯びていたのである。チェンバレンが謝辞を述べて閉会を告げ、カールトン・クラブにおける歴史的な集会は終った。集会終了後、チェンバレンは直ちに辞表を提出して党指導者の地位から退いた。集会の結果を見守っていたロイド・ジョージも、ついに首相職を辞任するに至った。

それにしても、「反乱」の先頭に立ったボールドウィンの活躍は注目されるべきものであったと言えよう。かれのたった八分の演説が、以後のイギリス政治の方向を定めるうえで極めて大きな比重をもったと言っても、決して言い過ぎではないように思われるのである。この日の朝、ボールドウィンに黙って会場の付近まできて、路上にとめた自動車のなかで、ディヴィッドソン夫人やボールドウィンの秘書G・フライ(Geoffrey Fry)とともに集会の成り行きを見守っていた妻ルーシーの心配[123]は、まったくの杞憂と化してしまった。ディヴィッドソンが言っているように、当日の「演説のうちで最高のものはもちろんボールドウィンとボナー・ローのそれ[124]」であったし、さらにS・ホアーも

言っているように、ボールドウィンの発言は、「次の一二年間に派生するさまざまな事態を方句づけることになる、かれの一連の決定的な演説の最初のもの」[125]となったのである。カールトン・クラブ集会におけるかれの行動は、かれがついにイギリス政治の表面に踊りでたことを、鮮明に刻した。ボールドウィンの新しい出発が始まったのである。

六、おわりに

カールトン・クラブ集会は、スタンリー・ボールドウィンにとっては国家的指導者として政策決定過程に参与しうる記念すべき跳躍台となった。すでに述べたように、この時期のボールドウィンは、日記や書簡のたぐいをほとんど残しておらず、したがってその政治的飛躍をめぐるいわば懊悩と歓喜に関しても、なお依然として不透明なヴェールに覆われている部分が多い。けれども、少なくともロイド・ジョージの政治指導に終止符を打ち、「連立内閣」を打倒するためには、ボナー・ローのそれとともに結局ボールドウィンの発言と行動が必要とされたのであり、この意味で、かれの政治経歴のなかでもまったく希有なこの一九二二年一〇月の「体験」が、かれに大きな自信を与える契機となったことは確かであった。カールトン・クラブ集会の直後、ボールドウィンはボナー・ロー保守党内閣のもとで蔵相の地位をえ(一九二二年一〇月)、ついでボナー・ローの病気引退のあとを受けて、首相の印綬を帯びるにいたる(一九二三年五月)。まことに一九二二年は、ボールドウィンにとって新しい躍動的な時代の始まった年である、と言っても決して過言ではないであろう。

しかも、こうしたボールドウィンの政治的飛躍は、保守党内部における政治的パターンの変化と密接に関連していたと言う点で、保守党史上における重要な転機を象徴していた。ここで言う政治的パターンの変化とは、大局的にみ

て、カールトン・クラブ集会によってはじめてバックベンチ・ポリティックスが現実化したと言うことを意味し、一般議員が始めて、しかも公然と党指導者層の決定を覆しえたと言うことを意味した。たしかに集会自体において、発言に多くの時間を費した人々は必ずしも一般議員ではなく、それはチェンバレンやボナー・ローやバルフォアなどの指導者層に限定されていた。しかしM. Kinnearも、カールトン・クラブ集会のゆくえを決定したのは結局は集会が開催される以前に態度を決定していた議員たちであったと言っているように、[126]個々の指導者の発言の背後に、厳然として一般議員の意志が存在していたことは疑いえなかったのである。言い換えれば、集会の結果は党の指導者層にとっていわば侮辱であった。[127]だからおもな党指導者たちは、集会直後に組閣されたボナー・ロー内閣への協力をほとんど断ったのである。ボナー・ローから蔵相の地位を申し出られながら、しかし自分が受け入れることのできるのはカンタベリーのアーチビショップの地位だけであるなどと言ってそれを撥ねつけたバークンヘッド[128]の怒りに、これは典形的に示されよう。ボールドウィンが台頭しえたのは、逆に言えば、かれがこのように党指導者たちを激怒させた一般議員の潮流に乗っていたからなのであり、全体としてその政治的動向と決して遊離することなく行動したからであった。かれの政治的台頭は党内政治の近代化の動きと、その根底において密接に関連していたのである。こうして、ボールドウィンは現代イギリス保守党の歴史的開幕を告げる象徴的な人物であったと、言っても差支えないのである。

ただ、ボールドウィンの個人的な政治的成熟や飛躍とは別に、現にカールトン・クラブ集会が少しもイギリス政治の混乱を鎮静する契機とはなっておらず、かつ政治的安定化の端緒であるにはほど遠い存在であったと言う指摘があることも、[129]無視できないであろう。保守党内においては、右に述べた党指導者層のボナー・ロー内閣への協力拒否、あるいは敵対によって、依然として党分裂の可能性が続いていた。チェンバレンなどは、集会以後も反社会主義政治戦

線結成の正しさを疑わず、その指導者にあくまでもロイド・ジョージを擬していたぐらいであった。[130] ボナー・ローの健康問題をここでは一応問わないとして、さらに政局全体の動きをみても、保守党・自由党・労働党は互いに鎬を削るような指導権争いを展開しており、どちらの政党がどちらを批判しているのか誰れにもわからないような混乱が現出していた[131]のである。こうした状況は、二二年・二三年・二四年の総選挙を通じて継続される。しかしカールトン・クラブ集会が、あらかじめこれらの政治的不安定の解消に直接有効な解決策を提起した様子はみられなかったのである。[132]

しかし、一九一八年以降の歴史的文脈を瞥見してみれば、少なくともこのカールトン・クラブ集会が保守党のみならずイギリス政治にとって巨大な転換点を形づくっていた事はすぐに理解されよう。それは、この集会を契機として、保守党が労働党の脅威に対決するのに力をもって臨むことをやめたと言うことであり、そうした政治路線の採用によってイギリス政治の不安解消に関する長期的展望がひらかれたと言うことである。同集会直後発足したボナー・ロー内閣は、さまざまな難問をかかえながら、しかしその主たる政治的課題を「常態への復帰(リターン・トゥ・ノーマルシー)」に定めた。ボナー・ローはそのため、みずからの政治的姿勢を明らかにした。それはたとえば、ソールズベリの同内閣への入閣にもかかわらず、同内閣が全体としてダイハーズの影響力や圧力をまぬがれていたことなどに窺える。[133] そしてさらに、同じ課題はボナー・ローのあとを受け継いだボールドウィンによって、周知のように力強く継承された。ボールドウィンが、一九二六年のゼネ・スト時に至るまで一貫してこれの実現のために苦闘したのである。こうした歴史の転換が、一九二二年一〇月一九日を契機としてもたらされたことは明らかであり、またそれが、同集会の席上ボールドウィンやボナー・ローによって表明されたかれらの政治的立場や思想に深く規定されていたことも明らかである。ボナー・ローが組閣したとき、バークンヘッドがこれをみて、同内閣を「第二流の識者(インテレクツ)」からなりたつものと冷笑した。しかしその

時、R・セシル（Robert Cecil）がこれに答えて、「イギリスは第二流の人物（キャラクターズ）（バークンヘッドのような人物をさす）によって統治されるよりも、第二流の識者（インテレクツ）によって統治される方を好む」と切り返したと言う。[134] つまり、カールトン・クラブ集会は、戦後の混乱期にとられた才気ばしった冒険的な政治方法を一切否定し、迂遠ではあるが着実な政治方法にもどることを提唱した集会であったのであり、以後イギリス保守党はこうした立場から現代におけるさまざまな課題にとり組もうとしたのである。ボールドウィンの台頭とカールトン・クラブ集会の歴史的意義が、今日なお検討されるべき重要な諸側面を秘めていると考えられるゆえんである。

（1）Cf. A. J. P. Taylor, *Politics in Wartime and other Essays*, pp. 127–128.

（2）小論ではP・ケアーをロイド・ジョージ側近の「野心家」の一群に加えたが、しかしかれが後に産業構造と労使関係について一定の見識を示し、ロイド・ジョージに苦言を呈する近代的政治家として再登場することについては、たとえば、John Campbell, The Renewal of Liberalism: Liberalism without Liberals, in Gillian Peel & Chris Cook (ed), *The Politics of Reappraisal* 1918–1939, p. 96 ff 参照。

（3）「ガーデン・サバーブ」とは、首相の私的な政策立案機関につけられた呼び名であるが、これは首相の相談にのった人々の事務所が、ダウニング街一〇番地の裏庭にあった建物の一部におかれていたからそう呼ばれるようになったものである（Cf. C. L. Mowat, *Britain between the Wars* 1915–1940, p. 14）。なお、ちなみに別の本によれば、同機関はセント・ジェームス公園（St James's Park）の一部にあったと表現されるが（Cf. A. J. P. Taylor, *English History*, p. 112『イギリス現代史』I 都築忠七訳七〇）、しかし周知のように、首相官邸の裏庭はただちにセント・ジェームス公園に続いており、これは結局同じ場所をさしている。

（4）Cf. K. O. Morgan, Lloyd George's Stage Army: The Coalition Liberals, 1918–22, in A. J. P. Taylor, *Lloyd George: Twelve Essays*, pp. 233–234.

（5）K. O. Morgan, *Ibid*, p. 233.

(6) L. S. Amery, *My Political Life*, vol. II. pp. 225-226.

(7) A Gentleman with a Duster (Harold Begbie), *The Conservative Mind* (London, 1924). p. 19 なお、'A Gentleman with a Duster' と言う匿名の正体がH・ベグビーであることは、K. Middlemas & J. Barnes, *Baldwin: a biography*, p. 97 に引用されたものから類推した。ただし、K. Middlemas & J. Barnes は同著者による別のテキスト *The Windows of Downing Street* を使っている。

(8) A Gentleman with a Duster (Harold Begbie), *Ibid*, p. 18.

(9) H. Montgomery Hyde, *Baldwin: The Unexpected Prime Minister* (London, 1973). p. 86.

(10) A Gentleman with a Duster, *op. cit.*, pp. 15-21.

(11) R. R. James, *Memoirs of a Conservative: Memoirs and Papers of J. C. C. Davidson*, p. 103.

(12) Lord Beaverbrook, *The Decline and Fall of Lloyd George*, p. 190.

(13) A. W. Baldwin, *My Father: The True Story*, p. 99.

(14) A. W. Baldwin, *Ibid*, pp. 81-2. p. 95 ff cf.

(15) W. Steed, *The Real Stanley Baldwin*, p. 24.

(16) A. W. Baldwin, *op. cit.*, p. 82.

(17) 以上 *The Times*, 18 March 1922.

(18) こうしたボールドウィン像は、ボールドウィンの伝記作家によって従来から示されてきたいわば共通イメージであるが、この点についてはとりあえず、A. W. Baldwin, *op. cit.*, p. 94 ff. R. R. James *op. cit.*, p.105 などを参照せよ。

(19) R. R. James, *op. cit.*, pp. 114-5.

(20) Cf. J. P. Mackintosh, *The British Cabinet*, p. 395.

(21) K. Middlemas & J. Barnes, *op. cit.*, p. 67, pp. 72—73.

(22) K. Middlemas & J. Barnes, *op. cit.*, p. 73. A. W. Baldwin, *op. cit.*, pp. 90-91.

(23) ボールドウィンは、この書簡でおおよそ次のように述べた。すなわち、かつて一九一四年八月われわれは戦争と言う国家存亡の危機に直面して、老人も若人もまた婦人までも一致団結して国のためにつくした。ところで戦争が終ったいま、われわ

れはさらに新しい危機に直面するに至った。それは戦時下の禁欲生活の反動として物質主義と浪費の風潮が瀰漫し、財政上の危機に落ち入っていると言うことである。これは、どうして解決できるだろうか。一番良い方法は、富裕階級が自発的に国家に献金することである。わたくし自身の財産は、いま五八万ポントに達するが、わたくしはこのうち二〇%を換金して国庫に入れたいと思っている。ボールドウィンは、およそこう言う論旨のアピールを行なったのである。(Cf. A. W. Baldwin, *op. cit.*, pp. 90-91) なお、この書簡公表後ボールドウィンは実際に一五万ポンドを献金し、「富裕階級」がこれに続々と続くことを期待したが、ボールドウィン以外の人々が献じたものは、結局総額五〇万ポンドにとどまり、ボールドウィンの当初の予定一兆ポンドにはとうてい及ばず、かれの自己犠牲は失敗に帰した。これはボールドウィンがまだ戦後国民の考えや行動のパターンをよくみきわめられなかったからであろう。(Cf. W. Steed, *op. cit.*, p. 29)

(24) 産業保護法は、輸入商品に対する二種類の課税条項を設定したものである。それらは(イ)一定の重要品目、ことにドイツからの供給品目に対して約三三・三三%の課税を課し、さらに(ロ)少なくともイギリス商品より安価に売買されている外国商品に対して、付加的に約三三・三三%の課税を実施することからなりたっていた。これらの条項は、とくに後者の条項の目的がそうであったように、雇用安定の問題などと関連していたが、しかし必ずしもこれが全体として世論に歓迎されたと言うわけではなく、『タイムズ』などは批判的な立場を示した。以上の詳細については K. Middlemas & J. Barnes, *op. cit.*, p.81.

なお、ボールドウィンはこの当時完全な保護貿易論者であったと言うわけではなく、あまりにも厳しい関税の障壁をもうけることに効果があるとは必ずしも考えていなかった。保護貿易に関する当時のボールドウィンの態度に関しては、K. Middlemas & J. Barnes, *op. cit.*, pp. 81-83.

(25) ボールドウィンは、始めから自由党内の相剋に拍車をかけ「連立内閣」の一方の支柱を破壊することを意図して、この法案の成立に努力したわけでは決してなかった。しかし結果として、そうした効果がえられたことは誰れしも否定できないであろう。すなわち、アスキス派自由党は自由党の伝統的立場をすて、同法案の通過を認めようとする連立派自由党に警告を発する意味で、W・ベン (Wedgwood Benn) をして同法案徹廃の動議を提出させた。これが投票に付されるや、一九人の連立派自由党議員がW・ベンの提案に賛成し、政府提案の同法案成立に賛成した連立派自由党の議員は、結局ロイド・ジョージとチャーチルをふくめてたったの一八人にとどまるに至ったのである。これは連立派自由党の指導者を動揺させたし、連立派自由党の力を弱めることになった。(K. Middlemas & J. Barnes, *op. cit.*, p. 85 H. Montgomery Hyde, *op. cit.*, p. 90) な

お、この法案成立に関する閣内の動揺ぶりについては、さらに Lord Beaverbrook, *op. cit.*, p. 28 が詳しい。いずれにせよ、以上の法案通過を契機として政治家としてのボールドウィンが政治的に注目されだしたことは、かれの歴史的台頭を問題にするかぎり、決して小さな事ではない。

(26) L. S. Amery, *op. cit.*, vol. II pp. 226-227.

(27) K. Middlemas & J. Barnes, *op. cit.*, p. 98-99.

(28) 以上のような解釈と全く逆の見方をするものとして、たとえば Cf. Francis Williams, *A Pattern of Rulers* (London, 1965), pp. 15-16.

(29) Cf. G. M. Young, *Stanley Baldwin* (London, 1952) p. 33 ff. K. Middlemas & J. Barnes, *op. cit.*, p.99.

(30) A. W. Baldwin, *op. cit.*, p. 98.

(31) G. M. Young, *op. cit.*, p. 33.

(32) W. S. Adams, Lloyd George and the Labour Movement, *Past and Present*, Number 3 February 1953. p. 60. Cf. Ralph Desmarais, Lloyd George and the Development of the British Government's Strikebreaking Organization, *International Review of Social History* vol. xx 1975. part 1, Ralph Desmarais, The British Government's Strikebreaking Organization and Black Friday, *Journal of Contemporary History* vol. 6. No. 2.

(33) G. M. Young, *op. cit.*, p. 35.

(34) Cf. K. Middlemas & J. Barnes, *op. cit.*, p. 95 ff.

(35) G. M. Young, *op.cit.*, p. 30.

(36) G. M. Young, *op. cit.*, p. 31.

(37) Cf. A. J. Beattie, British Coalition Government Revisited, *Government and Opposition*, October 1966. p. 18 ff.

(38) Cf. A. J. Beattie, *Ibid.*, p. 18, 30.

(39) *Gleanings and Memoranda*, November 1922 p. 492.

(40) Cf. Lloyd George to A. Chamberlain, 27 February 1922. *Lloyd George Papers* F/7/5/6, Cf. Sir Charles Petrie, *Life and Letters of Sir Austen Chamberlain*, vol. II. pp. 177-178.

(41) R. R. James, *op. cit.*, p. 105.
(42) K. Middlemas & J. Barnes, *op. cit.*, p. 97. G. M. Young, *op. cit.*, p. 79.
(43) K. Middlemas & J. Barnes, *op. cit.*, p. 97.
(44) R. R. James, *op. cit.*, p. 114.
(45) 以上 The Recollections of a Cabinet Breaker's Wife on the Government Crisis, October 1922 in *Baldwin Papers*, vol. 42 (D. 4. 2) 以下引用に際して Mrs. Baldwin's Recollections と略す。
(46) K. Middlemas & J. Barnes, *op. cit.*, p. 112.
(47) K. Middlemas & J. Barnes, *op. cit.*, p. 112.
(48) Lord Beaverbrook, *op. cit.*, pp. 165–166.
(49) Cf. Harold Nicolson, *Curzon: The Last Phase* 1919–1925 (London, 1937), p.275. K. Middlemas & J. Barnes, *op. cit.*, p. 12.
(50) Mrs. Baldwin's Recollections.
(51) *The Times*, 7 October 1922.
(52) Quoted in R. Blake, *The Unknown Prime Minister*, p.449.
(53) R. Blake, *Ibid.*, p.448. ボナー・ローの書簡の公表に関して、これのもつ政治的重みを正確に評価し、さらにボナー・ローの政界復帰の可能性をいち早く察知したのはバークンヘッドであった。ところが奇好なことに、ロイド・ジョージはそのことをほとんど理解できずに、バークンヘッドに言われて始めて事の重大さに気づくしまつであった。そこで、ロイド・ジョージは慌ててボナー・ローに外相の地位を提供して宥めようとしたが、ローはこれを拒絶した (K. Middlemas and J. Barnes, *op. cit.*, pp. 114—115)。
(54) R. Blake, *op. cit.*, p. 448. Lord Beaverbrook, *op. cit.*, p. 171.
(55) R. Blake, *op. cit.*, pp. 529—530.
(56) 詳しくは、Sir Charles Petrie, *op. cit.*, vol. II p. 196 ff ちなみにこの時の出席者は、ロイド・ジョージ、A・チェンバレン、バークンヘッド、W・チャーチル、R・ホーン (Sir Robert Horne)、L・ワーシングトン・エヴァンズ (Sir

Laming Worthington-Evans)などであった。

(57) しかし、この時点におけるロイド・ジョージや保守党指導部の状況認識は完全に一致していたと言うわけではなく、方針決定の背後でさまざまな計算を働かしていた。たとえば、チェンバレンがそうであった。かれは、たしかにチェッカーズでは保守党の分裂を避ける意味でも直ちに総選挙に訴えるべきであると主張した。しかし、かれはそう主張しながら選挙後にロイド・ジョージに代ってみずから権力を握ることを考えていたのであった。それは、かれがチェッカーズの決定をG・ヤンガーなどに説明するに際しておよそ次のように述べていたことに明らかであろう。すなわち、現時点においてロイド・ジョージが連立派自由党を掌握しているかぎり、かれからはなれることは不可能であるが、しかし選挙を行ないば、ロイド・ジョージは恐らく五〇人か六〇人の自派議員しか当選させられないのであるから、結局引退せざるをえなくなり、権力は保守党のものになる。さらに、現時点で直ちにロイド・ジョージを打倒するのはダイハーズの勝利を印象づけることになり好ましくない、と言うことであった。つまり表面上は「一致」しながらも、その背後でこのようにさまざまな計算を働かしていたのである(以上は、Sir Charles Petrie, *op. cit.*, pp. 196—198)。

ただ、筆者にはチェンバレンは、結局権力をとる決断を下せなかったところに保守党指導者として悲劇的な結末をむかえざるをえなくなるもの、と思われる。つまりチェンバレンは、実際上行動のうえで最後までロイド・ジョージからはなれられず、みずから失墜してしまうのである。

(58) R. R. James, *op. cit.*, p. 119.

(59) Mrs. Baldwin's Recollections.

(60) R. R. James, *op. cit.*, p. 119.

(61) これは、七月の始め頃R・サンダース(Sir Robert Sanders)が保守党の若手閣僚を組織してチェンバレンに面会し、保守党の結束とロイド・ジョージからの独立を要求したもの。チェンバレンはこれに対して慇懃に検討することを約束したが、しかし実際にはなにもしなかった。そこで、若手閣僚は八月三日ふたたびチェンバレンに面会し要求をつきつけたものである(以上は、K. Middlemas & J. Barnes, *op. cit.*, p. 108)。

(62) L. S. Amery, *op. cit.*, vol. II p. 233.

(63) L. S. Amery, *op. cit.*, vol. II p. 235.

(64) Cf. Sir Charles Petrie, *op. cit.*, p. 199.
(65) Mrs. Baldwin's Recollections.
(66) *The Times*, 14 October 1922.
(67) *The Times*, 16 October 1922.
(68) Harold Nicolson, *op. cit.*, pp. 279–280.
(69) Harold Nicolson, *op. cit.*, p. 276. A. J. P. Taylor, *Beaverbrook* (London, 1972) p. 265.
(70) Harold Nicolson, *op. cit.*, p. 277.
(71) たとえば Cf. Lord Beaverbrook, *op. cit.*, p. 188.
(72) R. R. James, *op. cit.*, p. 121.
(73) R. R. James, *op. cit.*, p. 121. Sir Charles Petrie, *op. cit.*, p. 200.
(74) Sir Charles Petrie, *op. cit.*, p. 200.
(75) Sir Charles Petrie, *op. cit.*, p. 200.
(76) なお、チェンバレンは以上のようにしてカールトン・クラブに全議員を召集して事態を検討することに妥協したのである。が、しかしこれはかれにしてみれば何も政治的な譲歩を意味しなかった。むしろ逆に、それは望むところであったのである。と言うのは、一般に党大会よりは議員集会の方がはるかに多数派工作がしやすく、今回の問題でもかれは充分に勝てると考えたからであった。したがって、カールトン・クラブ集会開催の決定は、党内批判分子が党指導部に対して要求したから執行部がいやいや妥協したと言う性質のものではなく、逆に充分に事態を乗り切ることができると計算したチェンバレンの自信が引きだしたものであったのである（以上、R. Blake, *op. cit.*, p. 451）。
(77) カールトン・クラブ集会は、はじめは一八日に開催されることになっていたが、実際にはニューポートにおける補欠選挙の結果をみるため、翌日の一九日に延期されたものである。Cf. M. Cowling, *The Impact of Labour* 1920–1924, p. 209.
(78) Lord Beaverbrook, *op. cit.*, p. 190. Cf. R. R. James, *op. cit.*, p. 121.
(79) R. R. James, *op. cit.*, p. 120.
(80) Mrs. Baldwin's Recollections.

(81) Mrs. Baldwin's Recollections.

(82) Cf. R. R. James, *op. cit.*, pp. 121—122, L. S. Amery, *op. cit.*, pp. 235—236, K. Middlemas & J. Barnes, *op. cit.*, p. 118 ff.

(83) K. Middlemas & J. Barnes, *op. cit.*, p. 118 なお、Cf. Viscount Templewood, *Empire of the Air*, p. 21 ff, *The Times*, 16 October 1922.

(84) L. S. Amery, *op. cit.*, p. 236, Cf. M. Kinnear, *The Fall of Lloyd George: The Political Crisis of* 1922. p. 122, *Daily Express*, 17 October 1922.

(85) Cf. R. R. James, *op cit.*, p. 122.

(86) Mrs. Baldwin's Recollections.

(87) R. R. James, *op. cit.*, p. 122.

(88) L. S. Amery, *op. cit.*, pp. 236-237 ただし、この時点でエイマリーが事態収拾のため妥協案を提示したことについて、ここで一言しておこう。それは一七日の夕刻カナダの閣僚たちとの晩饗会でビーヴァブルックがエイマリーに示唆したものであるが、実はこれはすでにエイマリー自身が一六日に次官クラス政治家の前で明らかにし、かつかれらからその可能性について一度否定されたものであった。その内容は、要するに事態収拾のためとりあえず選挙に突入し、そのうえで、組閣に着手する前に党大会を行なうと言う案であった。エイマリーは、一八日自派の議員を説得してこの妥協案のもとに事態を乗り切ろうと画策し、ボールドウィンに対しても次のような内容をもつ覚書を示したのである。(一)まず、翌一九日のカールトン・クラブ集会においては、あくまでも統一を守り、すべてを選挙後に決着するようにとりはかろうこと、(二)ボールドウィン、エイマリーに同調的な人々をできるだけ閣内にとどめるよう工夫すること、である。なお、前者に関しては自由党との協力関係を保ちながら、しかも独立した形で選挙を闘うことを意味している。

この案に対して、ボールドウィンはボナー・ローと相談することを望んだが、そうこうするうちにチェンバレンなどが結局この案を採用するに至らず、同案は反故に帰してしまうのである(以上、L. S. Amery, *op. cit.*, vol. II pp. 237-238)。

(89) R. R. James, *op. cit.*, p. 122.

(90) Mrs. Baldwin's Recollections.

(91) K. Middlemas and J. Barnes, *op. cit.*, p. 121.

(92) Mrs. Baldwin's Recolletions, K. Middlemas and J. Barnes, *op. cit.*, p. 121.

(93) Cf. Mrs. Baldwin's Recollections, K. Middlemas and J. Barnes, *op. cit.*, p. 117.

(94) K. Middlemas & J. Barnes, *op. cit.* p. 121. Viscount Templewood, *op. cit.*, pp. 25—26.

(95) M. Kinnear, *op. cit.*, pp. 56—57, pp. 59—60.

(96) Lord Beaverbrook, *op. cit.*, p. 198.

(97) Mrs. Baldwin's Recollections.

(98) Mrs. Baldwin's Recollections, *The Times*, 20 October 1922.

(99) M. Kinnear, *op. cit.*, p. 125.

(100) R. R. James, *op. cit.*, p. 127. Lord Beaverbrook, *op. cit.*, p. 200.

(101) Lord Beaverbrook, *op. cit.*, p. 200.

(102) Lord Beaverbrook, *op. cit.*, p. 200.

(103) 以上、Lord Beaverbrook, *op. cit.*, p. 200, Cf. *The Times*, 20 October 1922.

(104) R. R. James, *op. cit.*, p. 129 ff.

(105) 詳しくは John Ramsden, The Newport By-Election and the Fall of the Coalition, in Chris Cook & John Ramsden (ed), *By-Elections in British Politics* (London, 1973) p. 14 ff.

(106) M. Kinnear, *op. cit.*, p. 124.

(107) *The Times*, 19 October 1922.

(108) 以上、*Gleanings and Memoranda*, November 1922. pp. 487-489.

(109) M. Kinnear, *op. cit.*, pp. 126—127.

(110) Viscount Templewood, *op. cit.*, p. 31.

(111) *Gleanings and Memoranda*, November 1922. pp. 489—490.

(112) K. Middlemas and J. Bames, *op. cit.*, p. 122.

(113) L. S. Amery, *op. cit.*, p. 239.
(114) *The Times*, 20 October 1922.
(115) *Gleanings and Memoranda*, November 1922. p. 490.
(116) *Gleanings and Memoranda*, November 1922. p. 490.
(117) *Gleanings and Memoranda*, November 1922. pp.490—500.
(118) R. Blake, *op. cit.*, p. 457.
(119) *Gleanings and Memoranda*, November 1922. pp. 491—493.
(120) *Gleanings and Memoranda*, November 1922. pp. 493—494.
(121) L. S. Amery, *op. cit.*, p. 239.
(122) *Gleanings and Memoranda*, November 1922, p. 495.
(123) Mrs. Baldwins Recollections.
(124) R. R. James, *op. cit.*, p. 127.
(125) Viscount Templewood, *op. cit.*, p. 32.
(126) M. Kinnear, *op. cit.*, p. 131.
(127) M. Cowling, *op. cit.*, p. 251.
(128) M. Cowling, *op. cit.*, p. 253.
(129) Cf. M. Kinnear, *op. cit.*, p. 136.
(130) M. Cowling, *op. cit.*, p. 253.
(131) M. Kinnear, *op. cit.*, p. 135 ff.
(132) M. Kinnear, *op. cit.*, p. 136 ff.
(133) M. Cowling, *op. cit.*, pp. 237—239.
(134) Kenneth Rose, *The Later Cecils* (London, 1975), p. 90.